

2022年1月2日（日）

＜新年礼拝＞

題 『喜び・祈り・感謝』

テキスト：テサロニケ人への手紙Ⅰ 5章：15～18節

クリスマスの光に包まれて2022年の新年礼拝に集えました事をうれしく神さまに感謝します。皆さまとご家族の上に神さまの平安をお祈りいたします。

さて、今日の聖書の個所は、伝道者パウロが書いたテサロニケ人への手紙Ⅰ 5章：15～18節です。年の始めに共に心の耳を開いて聞きたいと願っています。

16:いつも喜んでいなさい。

17:絶えず祈りなさい。

18 どんなことにも感謝しなさい。

これこそ、キリストイエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。

この言葉を愛唱聖句にされておられる方も多いと思います。

この言葉を読む度に、わたしは既に天に召された教会員の兄弟を思い出します。このことばを良く語っておられました。ご自宅を訪問すると、この御言葉が壁に掲げられていました。

信仰者として生きる上で、信徒の関係、交わりにおいても大切な言葉の一つだと思っています。

16:いつも喜んでいなさい。

17:絶えず祈りなさい。

18 どんなことにも感謝しなさい。

これこそ、キリス

イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられる

ことです。皆様、いかがでしょう？

ところで、このパウロの書いたテサロニケ人への手紙Ⅰ とつけられた手紙は、新約聖書に納められて文書の中で、実は一番古い書物だと言われています。

パウロがテサロニケの地に住んでいる信徒たちのことを思い祈りを捧げ、心を注いで書いた手紙です。パウロは、この手紙を「テサロニケ人への手紙Ⅰ」とつけていたのではありません。後の人たちが聖書を編纂した時にこの名前をつけたのだと思われます。

ともかく、この手紙によって一番古い時代のキリスト者たちが、現実生活を送る中で何を大切にしていたかということが分かります。

このことばをもう少し内容に入って見て行きましょう。

まず「 16:いつも喜んでいなさい。」ということです。

ところで、皆さんは、どんな時に喜びを感じますか？

こども時代のこと、受験で合格した時、就職試験に受かった時、結婚した時、こどもが生まれた時、こどもの成長や、仕事のこと、健康のことなどなどいろいろだと思います。みなさまご存じのように、人生には苦しみや悩みが多いものです。イエスさまは、愛する弟子たちに人生には苦しみや悩みが多い事を語っておられました。仏教では人生には、4つの大きな苦しみがあると教えます。「4苦8苦」の4苦です。それば、貧しいこと、病気、また老いる事であり死ぬことです。人間どのような人でもこの4つの苦しみ、不安や悩みや心配から逃れることはできないのです。ある意味、人を縛る鎖のようなものです。

しかし、ありがたいことにイエスさまを救い主、キリストと信じる人たち、キリスト者は、悩み多い人生の中でも喜びを見出して生きることが出来るのです。なぜなら、その道をイエスさまは、愛を持って生き、十字架につき、罪と死の不安や恐れの中から解放し救い出してくださったからです。すべての人の救いのために、神の子イエスさまはこの世に来てくださったのです。

それを信じることがキリスト教です。

クリスマスの喜びの出来事は歴史の中で起こったのです。神の子をイエスさまの到来を毎年、繰り返し祝っているのです。その意味を知らない人も喜びに与っているのです。

音楽家バッハの曲に、「イエス マイネ フロイデ」という曲があります。その意味は、「イエスは我が喜び」という意味です。覚えておきたいと思います。そうです。イエスこそがこの私の、ここにいるわたしたちの、全人類の喜びなのです。新約聖書は、またいつかイエスさまに会えるという喜びの希望があることを語っています。パウロはそれを心から受け入れ、信じていたのです。ですから喜びの火は苦しみの中でも消えることはなかったのです。

「 16:いつも喜んでいなさい。」

同じくパウロが書いたフィリピの信徒への手紙では「主において常に喜びなさい。」と勧められています。主とは、イエスさまのことです。

イエスさまがいなければ、この世は、4つの苦しみの世界なのです。

イエスさまは、まことの光、永遠の命としてこの世に来てくださったのです。

道であり、真理であり、命なのです。それも永遠の命なのです。

このことを受け入れることのできる人たちは幸いなのです。

神さまの救いは、全人類のためにイエスさまとして用意されています。

それを受け入れるかどうかは、わたしたち人間の自由に任されているのです。

キリスト者は、イエスさまを受け入れない人たちを軽くみたり、軽蔑したりしてはいけません。それは愛に生きるキリスト者のとるべき態度ではないのです。他宗教の人たちを下に見たり、軽蔑してはならないのです。

すべての人は天の神さまが愛をもってお創りになった貴い存在なのです。

すべての人に尊厳さ、人権があるのです。

キリスト者の生活態度は、十字架につくほどに愛してくださっているイエスさまを思って主にある喜びを忘れないことです。「16:いつも喜んでいなさい。」そして、「17:絶えず祈りなさい。」 祈りの生活です。祈ることは人間だけができるのです。

また人は祈りの生活を続けることにより成長して行くのです。神さまの力である愛なる聖霊によって成長させてもらえるのです。祈りの生活は、決して生真面目ではないのです。時にユーモアもあるのです。一日の内のどこかで、神さまの前に心静める時を持つようにしたものです。その生活を続けて行く中で、神さまの力である愛の聖霊が心の内に注がれて、必ず成長していけるのです。

そして「18 どんなことにも感謝しなさい。」と。決して型ぐるしい、感謝を強要するような教えではないのです。感謝できるよいうこと、ありがたいと思えること、人に言えることはどんなにすばらしいことでしょうか。愛なる神さまはわたしたちのこれからの人生を導いてくださるのです。

わたしたちに必要なことは、大切なことは、神さまの愛、イエスさまの愛を親や子や、人から愛されたことを、自分の宝物とすることにあるように思います。自分が愛されていることということを知るという体験です。

教会では、神の愛とかイエス・キリストの愛を良く聴きますが、

わたしは、仏教の家に育って教会に通うようになって、神の愛とかイエス・キリストの愛と言われてもなかなか自分のこととしては分かりませんでした。ところが、大阪に住んでいた時、二十歳の時、洗礼を受け、教会学校の教師をして毎年教会学校で夏期キャンプに和歌山の海辺にある南部（みなべ）というところに行きました。そこで土地の項高齢の牧師から聞いた話が静かに深く心に染み入り残りました。愛と聞くと思い出す話があるのです。キャンプ中のある日の夜、キャンプ参加者を前にして、その土地の老人牧師の方が「親子貝」という話をしてくださったのです。

親子貝の母貝は自分の殻の中に子どもを産みます。そして、子どもは育って行

くのですが、子どもが成長した時には母は自分の身体の栄養をすべて子ども与えつくして死んで行くのだということでした。何と厳しい、悲しい話だろうかと思ったのですが、わたしの母親も8人の子どもを育てるために苦勞していました。一人を病気のために失いました。苦勞に生きる母の姿を思い、「親子貝」の話をとおして、母の愛を深く思ったのです。この話を聞き、イエス・キリストが私たち一人ひとりのために十字架に死んで行かれた、その愛の姿を思い、神さまの愛が少し分かったように思えたのです。

皆さん、今年もいろんな事があるでしょうが、教会に集う者同士が、イエスさまを思って仲よく歩みたいと願います。
また社会の中、世界で苦しみの中にある人々のことを覚え続ける主イエスにつながるわたしたちでありたいと願います。
主の平安を祈ります。

テサロニケの信徒への手紙 I 5 章 16～18 節(新 p.379)

16:いつも喜んでいなさい。

17:絶えず祈りなさい。

18:どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリストイエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。